

『サハ語文法——統語的派生と言語類型論的特異性』

(勉誠出版、2020年)

評者 落合 いずみ

本書表紙にある紹介文を引用すると、サハ語(別名ヤクート語)とは「日本の真北にあたる東シベリアで話されているチュルク系言語」である。サハ共和国は北緯60度以上の極寒の地であり、その北は北極海に至る。サハ語はチュルク語族に属する諸言語の中で北東の際に位置し、地理的に孤立しているのが特色である。西にはロシア語(インド・ヨーロッパ語族)、南にはモンゴル語族、東にはツングース語族といった他語族と隣接している。なお、チュルク語族、モンゴル語族、ツングース語族は「アルタイ系諸言語」というキーワードで一括りに扱われることもある。本書は著者の「長年のフィールド調査による記述研究」を基に日本語で著された「サハ語の初の記述研究書！」である。そして本書の狙いは「一見すると複雑なサハ語の形態音韻交替や形態統語法を言語研究一般へも資する形で整理することである。

本書は10章から成る。前半の5つの章(1. サハ語の概要、2. 形態音韻交替、3. 名詞類の形態統語法の概要、4. 動詞の形態統語法の概要、5. 主節述語に付加する接辞と文末接語)はサハ語の音韻・文法の記述言語学的な論述を、後半の5つの章(6. 語彙的派生と統語的派生、7. 名詞類の分類と統語機能、8. ボイス接辞による派生と非典型的構文、9. 目的語の形式選択に関わる要因、10. サハ語の特質)は前半の論述を一般言語学や言語類型論の視点からさらに深める議論を行う。

本書の想定読者は言語学研究に従事する者である。その中でもアルタイ系諸言語の研究者、さらにその中でもチュルク語族の研究者向けであると思われる。この限定的な読者層は、著者の学術的な教育背景によるところが大きいと考える(とはいえ日本において、アルタイ系諸言語に魅力を感じる研究者や、実際にそれらの言語を研究している専門家は少なくないため、読者のすそ野は広いとは言えるのだが)。本書の成り立ちについて「あとがき」に、著者が東京大学に提出した博士論文(江畑2012a)を基にそれに加筆・修正したものとある。さらに東京大学時代の著者の指導教員はトルコ語研究で著名な言語学者、林徹氏であると述べている。著者は東京大学言語学研究室におけるチュルク語族研究の学術的系譜を受け継ぐ一員として、チュルク語族を専門とする指導教員やアルタイ系諸言語を専門とする先達といった学術的グループの下、研鑽を積んできたことが窺える。それは、著者が博士論文の提出に至るまでに、その構成箇所を事前にいくつかの学術誌で発表してから、それらを取りまとめる作業を行うという、博士論文作成の上での模範とも言える過程を経たことからわかる。

「言語研究一般へも資する」目的においては、他語族の研究者にもわかりやすい用語の使用、または説明などの補足があればよりよいと感じる。例えばオーストロネシア語族を

専門とする評者にとって「形動詞」はなじみのない用語であった。その定義は「動詞語幹に形動詞接辞が付加したもの」(p. 76) とあるが、それでも飲み込めない。これに対し、江畑 (2013) では「分詞」という用語を使っており、これだと即座に理解できる。また、評者は読み進めるにつれて、人称代名詞の複雑な様相に興味を持つようになった。それについては「付録」としていくつかの表に詳細にまとめられているのだが、それらは全て屈折形であり、独立形が載せられていない。そのため評者は、人称代名詞独立形 (特に 1 人称と 2 人称) については本書の例文中から探し当て、1 人称単数 *min*、1 人称複数 *bihigi*、2 人称単数 *en* を得たのであったが、2 人称複数は見つけられなかった。そのため著者の学術誌論文を渉猟し、江畑 (2012b) によようやく 2 人称複数 *ehigi* を得たのであった。

本書の主眼はサハ語の文法を記述することであるが、それを通して筆者が伝えようとしているとしている第二の論点は、副題にもあるサハ語の「言語類型論的特異性」である。世界の多くの言語に共通して見られる文法的な類型があるとされるが、ある言語のある文法がその類型に当てはまらない場合に特異性を持つと言う。サハ語では、非人称受動文、二重対格使役文、そして統語的派生が特異な点であるという。例えば、「ドアを開けた」において、目的語「ドア」は対格で表示される。そして「ドアが開けられた」という意味の非人称受動文においても、「ドア」は対格表示のままであるという (「ドアを開けられた」のような表現)。次に、「ミーシャはマーシャに部屋を整理させた」という意味の文は二重対格使役文で表され、「ミーシャは『マーシャを』『部屋を』整理させた」のように、二重括弧の二つの項目がどちらも対格で現れる。そして、統語的派生は、統語的派生接辞の付加によってなされるが「屈折接辞への後続や語基の文法範疇の部分的保持が可能であるという特徴を持つ。つまり言語類型論的にみて……特異性を有する」(p. 109) と述べる。

サハ語の言語類型論的特異性と並行して、筆者が伝えようとしているもう一つの論点はツングース語族との言語接触である。系統的なサハ語の特徴を端的に表現するなら、チュルク系の骨格・肉体にツングース系の装いを纏っていると言えるだろう (ただし語彙についてはロシア語からの借用が多い)。9.5 節「系統的・地理的に見た分格」では、チュルク諸語の処格-*de* が、サハ語では分格の機能に変わったこと、その機能はツングース諸語と類似することを述べる。また 10.5 節「系統的・地理的に見たサハ語」では、主語表示における 3 人称単数・複数の区別、形容詞の副詞的用法など 7 つの項目における、チュルク諸語、サハ語、ツングース諸語のふるまいにおいてサハ語はツングース諸語と同一のふるまいを見せることをまとめている。

各章の末尾には「コラム」も収められており (第 10 章を除く)、各章にまつわる文法的な話題や筆者の分析を簡潔に提供している。この中で、評者が最も魅かれたのは「サハ語文法に「双数」の文法概念は必要であるか」(第 6 章) というコラムであった (必要ないというのが結論)。その中で「サハ語には *bihikki*「〜と私」および *ehikki*「〜と君」という形式がある」(p. 131) と言う。これらは先行研究で双数人称代名詞、集合人称代名詞などと扱われ、著者自身は代名詞ではなく後置詞として扱っている。研究者間でその取り扱いに一致が見られない、厄介な形式である。これを用いた例が [1] である (注釈に評者が多少変更を加えた、太字も評者による)。

- [1] *ubaj-im bihikki olus üör-en silž-a-bīt*
 兄-所有・1単数 と私 ととも 喜ぶ-副動詞 補助動詞-現在-1複数
 「兄と私はとても喜んでいる」

この構文を見て評者が想起したのが *inclusory construction* である。定まった和訳はないようだが、Ochiai (2019) は「伴連れ代名詞構文」と名付けている。端的に言うと、伴連れ代名詞構文は「私たち(と) マーシャ」、「君たち(と) ミーシャ」という構文を持ち、これらが「私とマーシャ(の二人)」、「君とミーシャ(の二人)」を表す。この構文について Lichtenberk (2000) はオーストロネシア語族のオセアニア諸語を例に議論しているが、構文に必要な要素は人称代名詞複数形と、その代名詞を名詞句(人を表す)とつなぐ連結辞である(ただし、連結辞は言語によって現れたり現れなかったりする)と言う。人称代名詞複数形は独立形と付属形(屈折や人称接辞など)二つのタイプがある。人称代名詞独立形は言語によって現れる場合もあれば、現れない場合もある。ただし現れない場合は人称代名詞付属形が必須となる。

[1] に当てはめてみると、人称代名詞付属形・複数形は末尾の語にある *-bīt*「私たち」にあたる。そして *bihikki* は、おそらく *bih-ikki* と分節できる。前半は *bihigi* 独立人称代名詞・1人称複数に由来するもの、後半は *ikki*、数詞の「2」だと考えられるのである(*bihigi-ikki* から縮約して *bih-ikki* に変化した)。台湾オーストロネシア諸語における伴連れ代名詞構文を論じた Ochiai (2019) において、数詞「2」がセデック語とブヌン語では連結辞の働きをするように文法化されたことを述べている。これと同じことが *bih-ikki* (私たち-2) にも言えるとすれば、これは人称代名詞独立形と連結辞の複合体ということになる。同様に *eh-ikki* も *ehigi-ikki* (君たち-2) から縮約した形式と分析できる。さらに、Ebata (2006: 6) には共格-LIIIn「～とともに」を連結辞として用いた疑似伴連れ代名詞構文とも呼べる例文 [2] が見られる(注釈などは評者が和訳した。太字も評者による)。

- [2] *buuraap-pw-naan kustaa-tftfw-bwt*
 弟-所有・1単数-共格 鴨狩をする-習慣-1複数
 「私は弟と鴨狩をする」

これは連結辞として *-naan* (-LIIIn の異形態) が用いられ、人称代名詞独立形 *bihigi* が現れず、人称代名詞独立形付属形 *-bwt* だけが現れた伴連れ代名詞構文のように見える。しかしこの例文に人称代名詞独立形を挿入する場合、Ebata (2006) の前後の文脈から推察するに、1人称複数の *bihigi* ではなくて1人称単数の *min* が現れるはずである。そうなるに伴連れ代名詞構文の定義にそぐわないので疑似的であるとした。ただ、この疑似的構文において人称代名詞付属形の複数性がより意識されるようになり、それに数で呼応するように人称代名詞独立形複数 *bihigi* が導入され、真正伴連れ代名詞構文になるという今後の道筋もありえないわけではない。さらに言えば、本書のもう一つのコラム「propriativeの接尾辞-LEExの多機能性」(第7章) において、所有を表す-LEExの機能の一つが共格の機

能と重複していると述べているが、伴連れ代名詞構文との関連において今後の-LEExの文法化の行方も気にかかる。

このように、「サハ語文法」をほかの系統の言語の文法と比較することで、サハ語の文法に新たな解釈をもたらすこともあるだろう。チュルク諸語、アルタイ系諸言語を問わず、言語研究に従事する多くの読者が、サハ語文法に触れることで言語類型論に、歴史言語学に新たな知見をもたらすこともあるだろう。

読者は以下の正誤表を併せて参考にされたい(著者自身や著者の研究仲間の指摘によるものも含む)。
 [p. 7: 1行目](主節述語と呼ぶ)→(文末接語と呼ぶ); [p. 7: 6行目] *túp*→*típ*; [p. 7: 8行目] *kýp*→*ku* "p [p. 7: 11行目] このとき強勢は重複部の最終音節に置かれる。(例) *tib-ís=timnii*「とても寒い」→p. 9: 注6の第二文目に移動; [p. 16: 2行目] 例えば、使役接辞-tEr→例えば、奪格-(t)tEn; [p. 34: 6行目] 母音脱落を引き起こすが→母音脱落を引き起こさないが; [p. 44: 3.2.5節: 7行目] 3.5.2節で示す→3.5.1節で示す; [p. 66: (3-50): 2行目] AUX-NEG: PST-COP. 1SG→AUX-NEG: PST- 1SG; [p. 137(A3): 4行目] 「入場券」→「入場券」; [p. 149: 7.4.3節 1行目] [3.3.1.7節]→[3.3.1.8節]; [p. 150: 7.4.5節 1行目]-LEExによる→-LEEx [3.3.2.2節]による; [p. 153: 7.4.8節: 1行目] [4.3.5.3節]→[4.3.5.2節]; [p. 154:(7-65): 3行目] インデントされていない; [p. 169: 注6: 5行目] *xotu dojdú*「北の国」と*xotu-gu dojdú*「北の国」→*xotu dojdú*「北国」と*xotu-gu dojdú*「北国」; [p. 174: [10]: 1行目] インデントがずれている; [p. 174: [11]: 1行目] インデントがずれている; [p. 177: 8.2.2節: 2行目] 前者の場合に→後者の場合に; [p. 177: 8.2.2節: 3行目] 後者の場合に→前者の場合に; [p. 229: 10.1節: 6行目] 例えば2.10節→例えば2.9節; [p. 234参考文献]「江畑 冬生(2013)」における『北方人文研究』→『北方言語研究』; [p. 234参考文献]「高島 尚生(2008)『基礎トウヴァ語文法』東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所。」を「庄垣内 正弘(2002)」と「津曲 敏郎(2001)」の間に追加。

参考文献・引用文献

- Ebata, Fuyuki (2006) Animacy in the expressions of accompaniment in Yakut (Sakha). Hiromi Yoshida and Yasuhiro Kojima (eds.), *Animacy in languages*, pp.1-13. Tokyo: 21st Century COE Program DALs, Graduate School of Humanities and Sociology, University of Tokyo.
- 江畑冬生(2012a)『サハ語名詞類の研究——接辞法と統語機能を中心に』東京大学博士論文。
- 江畑冬生(2012b)「サハ語(ヤクート語)の後置型連体修飾と数の一致」『東京大学言語学論集』32号、11-21頁。
- 江畑冬生(2013)「サハ語の動詞屈折形式とその統語機能」『北方言語研究』3号、11-23頁。
- Lichtenberk, Frantisek (2000) Inclusory pronominals. *Oceanic Linguistics* 39(1): 1-32.
- Ochiai, Izumi (2019) Inclusory construction in Seediq: Reconstruction. *Kyoto University Linguistic Research* 38: 1-28.

■ 評者紹介

- ①氏名(ふりがな): 落合 いずみ (おちあい いずみ)
- ②所属・職名: 室蘭工業大学 講師
- ③生年と出身地: 1979年、青森県生まれ
- ④専門分野・地域: オーストロネシア語族・台湾
- ⑤学歴: 京都大学文学研究科(言語学専修) 博士
- ⑥職歴: 日本学術振興会特別研究員PD(2017年 4月～ 2019年 3月)、北海道大学アイヌ・先住民研究センター博士研究員(2020年 4月～ 2021年 3月)、室蘭工業大学理工学基礎教育センター講師(2021年4月～現在)
- ⑦現地滞在経験: 台湾
- ⑧研究手法: フィールド言語学に基づいた歴史言語学
- ⑨学会: 北海道方言研究会、北海道民族学会、北方言語学会
- ⑩研究上の画期: いくつかある
- ⑪推薦図書: 内藤真帆(2011)『ソツバ語 記述言語学的研究』京都大学学術出版会。